
とある日常の最後欠片 <ラストピース>

こへい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある日常の最後欠片<ラストピース>

【Nコード】

N1441R

【作者名】

コーへい

【あらすじ】

東京西部に位置する、人口230万人のうち8割が学生の街、学園都市。そこには最強の超能力者・一方通行と、茶髪のアホ毛少女がいる。罪に苦悩しながらも正しい道に歩もうとする彼を待つ物語とは。一方通行と打ち止めが交差するとき、物語は始まる <
<3/10 『とある葉子の紛失事件』 完結>>

第1話 とある菓子子の紛失事件

「…………チツ、寝ちまつてたか」

彼が浅い眠りから醒めると、目の前に”それ”はあった。

「…………で、なんで寝起きにテメエの顔が目の前にあんだよ」

「え、えへへへへ、ってミサカはミサカは照れながら目を逸らしてみたり…………」

「…………テメエ、オレが寝てる間に何してやがった？」

「なっ、何もしてません！って、ミサカはミサカは必死に弁明してみたり！」

「見るからに怪しすぎるぞこのクソガキ」

なぜだか目の前で頬を赤く染めている打ち止めを横にどかし、一方通行はソファに起き上がった。時計の針は3時ちょうどを示している。どうやら4時間も寝てしまったようだ。

「（いつもながら寝過ぎだこのクソバカ…………）」

芳川の紹介で、彼女の友人である警備員の黄泉川愛穂の家に居候しているわけだが、時々このように無防備に眠ってしまうことがあった。それはここが安心感をもたらす場所であるが故なのだろうが、一方通行は素直にその事実を受け入れられずにいた。

「……まア、たしかに居心地は悪くねエけどなア」

「えっ、なにか言った？ってミサカはミサカは尋ねてみたり」

「別になンでもねエよ、……オイ黄泉川ア。メシあるかア？」

「ん？おお、やっとお目覚めじゃん。寝てるときの顔はちゃんとカメラに収めておいたから、何も心配する必要はないじゃん」

「会話が噛み合ってるねエぞ…肉塊になりたくなかったら今すぐそのデータ消しやがれこのバカ」

「またまた、一方通行が家主である私にそんなことする筈ないじゃん…ってあれあれ、目が凄く怖いんだけど。分かった分かった、消すからちよつと待ってるって」

家主であるはずの黄泉川は、居候から発せられる黒いオーラに身の危険を感じ、即座にデータを削除…と見せかけて素早くコピーして自分のパソコンに送信した。その後カメラ内のデータを全削除。学園都市製のカメラにここまでの機能があることを一方通行は知らないだろう。

「ほら、これで文句ないじゃんよ？」

得意気に黄泉川はカメラを一方通行に見せる。

「チツ……それで話を戻すが、メシはあンのかア？」

「こんな時間に食べるのかー？ もうおやつ時間じゃんよー」

「それならその”オヤツ”でもいいぜエ、とにかく腹減ったんだ」

なにせ彼は11時から寝ていたのだから、昼食を摂っていないのだ。

「ミサカもおやつ食べたい！ってミサカはミサカはヨミカワにおねだりしてみたり！」

「じゃあちよつと待つじゃんよー」

ゴソゴソと黄泉川がキッチンでおやつを探す音が聞こえる。……その音は暫く止むことはなかった。

「……いつまで探してんだ」

「あれ、おつかしいなー、お菓子が全部無くなってるじゃんよ」

「ええっ！そんなあ！ってミサカはミサカは落胆の表情を浮かべてみたり……」

「昨日確認したときにはかなりストックがあつたはずなんだけどなー……ともかく、おやつは無しじゃん」

「ま、全く、お菓子を全部食べるなんて許せない！ってミサカはミサカは憤慨してみたり！」

そこで一方通行と黄泉川は気付く。……いや、気付かない方がおかしいのかもしれないが。

「……待て黄泉川。この面子の中で、お菓子が大好きでお菓子をー晩で全部平らげそうなヤツは誰だア？」

「……どう考えても一人しかいないじゃん」

示し合わせたように一斉に2人の指先が打ち止めを指した。さながら犯人を指差す探偵のように。

「もっ、もしかしてミサカが犯人だとも思ってるのかなってミサカはミサカは驚愕を露にしてみたり!」

思ってもみない展開だと言わんばかりに打ち止めは飛び跳ねながら抗議を始める。

「ミサカは絶対に一人でお菓子を平らげるなんてことしないんだよ! ってミサカはミサカは無実を主張してみたり! …… たしかにお菓子は好きだけど、でもでも、今回は絶対無実!」

必死に身振り手振りで弁明を図る打ち止めだったが、

「何言ってるんだ、お前しか考えられねエだろオが」

「ぶっ、他に一体誰がいるじゃん」

「がーん! 取り付くしまもなし!?!」

打ち止め、あっさり多数決で敗北。有罪確定の瞬間だ。

「本当にミサカじゃないのに…… ってミサカはミサカは冤罪を主張してみたり……」

「ハイハイ、そういうことにおいてやんよオ」

「ぶつ、他に一体誰がいるじゃん」

「ひどーい！ー！」

全く信じてもらえない打ち止めなのだった。

だが彼らはこのとき知らなかった。この事件の犯人は、他にいたというこ

第1話 とある菓子の紛失事件（後書き）

こういう二次創作的なのは初めてなんです、なんとか書ききりた
いと思います。

次回の更新はいつになるやら…

第2話 とある菓子子の紛失事件2

「……………それにしても腹減ったなア」

一方通行は溜め息を吐きながら思わずそう呟いた。現在時刻は午後3時。朝食から何も口にしていないのだから当然といえば当然だ。黄泉川に昼食は無いと最後通告を言い渡され、仕方なく妥協して”オヤツ”を望んでも打ち止めに全て平らげられている始末だ（本人は犯行を否定しているが）。呆れて物も言えない。

一方通行の呟きが聞こえたのか、打ち止めが黄泉川への抗議を止めて彼に近づく。

「うーん、学園都市最強の超能力者でも飢え死にするのかな？つて、ミサカはミサカは好奇心に満ち溢れた顔であなたを見上げてみたり！」

「メシ食わなかったら飢え死にするのは当たり前前だろオガ」

「いやあ、そこはお得意のベクトル変換でちよいちよいつとー！」

「オマエ、オレのことを化物か何かだと勘違いしてンじゃねエか？」

呆れた顔で打ち止めに返答する一方通行だったが、

（……………「化物」って表現も別に間違っちゃいねエか）

自分で言ったことなのに、そんなことをついつい思ってしまう、乾いた笑いが零れる。そんな、彼の一瞬見せた悲しい表情を彼女は見

逃さなかった。

「と、突然そんな顔してどうしたの？って、ミサカはミサカは慌ててみたり」

「……別になんでもねえよ」

いつもそうだ。このクソガキはいつも、オレが何を思っているか、見抜いてきやがる。

「……腹ア減った」

この場を誤魔化すために、彼は今日二度目の溜め息を吐きながらそう呟いた。

それが、彼の墓穴を掘った瞬間だった。

「ふふふ、そうか、そんなに腹が減ったなら、お買い物に行ってもらおうかな」

黄泉川がここぞとばかりに一方通行に言う。

「アア？ ……めんどくせえからオレはパスなア」

「……ラストオーダー！ ちょっとこっち来て」

呼ばれた打ち止めが黄泉川にいるキッチンの方へ、とてとてと走っていく。なにやら2人で内緒話を始めた。こういうときは碌な展開にならない事を、一方通行は経験から感じ取っていた。

「オイ、テメエらなにし」

「それじゃラストオーダー、頼むじゃん」

……どうやら内緒話は迅速に終了したようだ。黄泉川は満面の笑み。打ち止めは引きつった微妙な笑みを浮かべている。

「あとで怒られるだろうけど、面白そうだから付き合っただけあげる！
ってミサカはミサカは上官に敬礼してみたり！」

そして元気よく敬礼した打ち止めは、妙に真剣な顔つきになった。

「チツ、テメエら何企ンで……………ッ!？」

彼の体に異変が訪れたのは、そのときだった。

一方通行の体が急速に平衡感覚を無くし、カーペットの床に倒れたのだ。

「（なんだこりゃア!? まさか、敵の襲撃ツ……）」

しかし、敵が襲撃してきた様子はない。倒れているのは自分だけだった。

……………”自分だけ”？

……………まさか。

一方通行の頭に唐突に嫌な想像がよぎる。…しかしこういつときの予感に限って当たるものだ。

気付くと目の前には、この家のボスである黄泉川愛穂の満面の笑みがあった。

「悪いが、ラストオーダーに頼んで、ミサカネットワークから一方通行への演算能力の補助を、一時的に遮断させてもらったじゃん」

「ごめんね一方通行！ 黄泉川に言われたから仕方ないんだよって、ミサカはミサカは涙ながらにあなたに訴えてみたり……」

「sdwfnjsg!! sgydsがydTY!!」

今すぐブツ殺す!! 覚悟しやがれエ!! と、彼は言いたいのだが、ミサカネットワークによる演算機能の補助が無くなった今、言語中枢に異常が出ているのでまともに喋ることができない。この状態になると彼は、芋虫のように這いずることしかできないのだ。

「一方通行、買い物、行ってくれるよな？」

ニヤニヤしながら黄泉川は一方通行へ同意を求める。

「wfjwkrt y! (ふざけてンじゃねエ!)」

「そうかそうか、行ってくれるか！ 私も今日は珍しく非番だから、外に買い物に行くななんてめんどくさいじゃんよー。今日は一日中家に引きこもるつもりだからな！ 一方通行が買い物に行ってくれるなら、これほどありがたいことはないじゃんよ」

黄泉川は最初から聞く耳を持つつもりなどないらしい。といっても、一方通行が何を言っているか本人以外分からないのは事実なのだ。

「そうと決まれば、さっさと行くじゃんよ!」

黄泉川が、カーペットに倒れた一方通行の体を軽々と片方の肩に持

ち上げる。さすがは体育教師兼警備員、一般的な女性とは比べ物にならない力を持っている。

言葉にならない叫び声を上げる一方通行と、申し訳なさそうな顔をしている打ち止めの2人を両肩に担いで玄関まで運び、ドアを開け、エレベーターに乗り、マンションの一階エントランスへ。そこにある四つのソファの一つに2人を座らせた。

「ふう。……相変わらずお前ら軽すぎじゃん。えつとそれじゃ、これでテキトーに食材とかお菓子とか買ってきてくれじゃん。夕食に使おうと思ってた玉ねぎがさつき確認したら切れてたから、これは絶対に買ってくることに。いいな、ラストオーダー？」

「わ、分かったってミサカはミサカはおつかいを頼まれてみたり！黄泉川から3000円を受け取った打ち止めは、嬉々としながらそう言った。

「それと一方通行。ちゃんと買い物してこないと家には入らせないから、そのつもりで頼むじゃん」

「s d l r!?(アア!?)」

「おー怖い怖い。こりゃ早めに退散した方が良さそうじゃん。ラストオーダー、今から3分経ったらミサカネットワークに繋げてやってくれ。それじゃ、おつかい頼んだじゃ〜ん」

そう言い残して黄泉川はエレベーターの所へ走り去っていった。エントランスに一方通行と打ち止めを残して。

「……」

「……」

こうして紛失事件から、2人の小さな小さな物語は始まった。
一方通行と打ち止めが交差するとき、”はじめてのおつかい”は始まる

……黄泉川のマンション、エレベーターにて。

「……ま、おつかい程度であいつが打ち止めに素直になるとは思えないけど、普段とは違うことをさせることで、何かが起こるかもしれないし、ね。こればかりは私も分かんないじゃん」

「まあ、あなたの考えは分かったけど、この計画行き当たりばったりすぎじゃない？」

「桔梗、それよりお前の口、なんかチョコくさいぞ。私がリビングで一芝居打ってるってときに呑気にも食べてたんだろー？」

「だ、だって、私は隣の部屋でお菓子を隠すだけの役目だったし……」

「だから暇で食べちゃったのか？ まったく、桔梗のお菓子好きは

今に始まったことじゃないけどなー」

「ええ、これからは気をつけ……。って、そんな設定あったっけ？」

「ははっ、細かいことは気にするなじゃん」

第2話 とある菓子店の紛失事件2（後書き）

意外に長くなりそうなので不安になったり。

次の更新はいつになるのやら。。

第3話 とある菓子子の紛失事件3

「あいたたた……それにしてもさっきのがまだ痛むよって、ミサカはミサカはおでこをさすりながら、あなたを般若のごとく睨み付けてみたり」

「……うるせエぞクソガキ。自業自得だろオが」

話は一時間前まで遡る。一方通行と打ち止めが、黄泉川と芳川の作戦により、マンションのエントランスに置き去りにされたところだ。打ち止めは言いつけられたとおり、黄泉川が去ってから3分後に、一方通行へのミサカネットワークによる演算機能の補助を再開させた。

「……」

ゆっくりと。一方通行が無言で、横たわっていたソファから起き上がる。黄泉川に打ち止めと共にエントランスに運ばれた時こそ言葉にならない奇声を上げていた一方通行だが、彼も馬鹿ではない。黄泉川が去った後は、それこそ借りてきた猫のようにおとなしくなっていた。そんな彼が今、一番すべきこと、それは。

「……」

べしっ。

と、エントランスに小気味のいい音が響いた。

「ふえっ！？ってミサカはミサ……痛い痛い痛い！」

「……」

一方通行は抗議の声を上げる打ち止めに構わず、ひたすら彼女のおでこに連続チヨップを繰り返していた。一定のリズムで叩いているからか、叩く度に実に小気味のいい音が鳴る。

ぺしっ。ぺしっ。ぺしっ。

「いたたたたたそろそろ許してってミサカはミサカはあなたに懇願してみたり〜！」

「……」

打ち止めが早口でそう言い終わったあとで、ようやく一方通行は彼女を解放した……かに思えた。

「はあー……やっと開放されたって、ミサカはミサカは嘆息してみたりっ！？」

すぱんっ。

エントランスにまたも小気味のいい音が響く。

「いったあ〜！！！」

「……ケツ、これで最後だ。ありがたく思いやがれ」

一方通行はささやかな復讐をデコピンで終えると、現代的な形状をした杖を支えにソファから立ち上がった。

「うう……やっぱりあなたは怒ったねって、ミサカはミサカはあまりの痛みにととうと涙目になりながら予想的中を宣言してみたり」

「んなの怒るに決まってるだろオが……黄泉川のヤロオ、無理矢理俺たちを買い物に行かせて、何企ンでやがる？」

「さ、さあ？って、ミサカはミサカはさりげなく視線を逸らしてみたり……」

先ほどのキッチンでの黄泉川と打ち止めの会議の内容はこうだった。

「……あいつはああ言ってるけど、どうしてもお前ら2人におつかいを頼みたいじゃんよー」

「でもでも、なんでそんなに私たち2人に行かせたいの？って、ミサカはミサカは当然の疑問を投げかけてみる」

「それは勿論、2人の仲をもっと親密にさせたいという、私からの配慮じゃんよー（棒）」

「ええっ!？」

「というわけで、ミサカネットワークからの演算機能補助を一時的

に遮断して、一方通行の抵抗を無くさせてほしいじゃん。司令塔であるラストオーダーならそれが出来るだろ？」

「で、できるけど……わ、分かった！」

「それじゃラストオーダー、頼むじゃん」

「（ついヨミカワの口車に乗せられてこんなことになっちゃったけど、今思い返してみるとあれって絶対買物に行かせる為の口実だよなって、ミサカはミサカは心の中で落胆してみたり）」

打ち止めが溜め息を吐いているのを尻目に、一方通行は一人考えていた。

「（黄泉川が何企ンでるのは知ンねエが……）」

「（……今回は企みにまんまとはまってやるとするかア）」

黄泉川にも芳川にも大きな借りがある。おつかいぐらい何のことはないだろう。もっとも、以前の彼を知る人間なら、こんな今の彼の行動に驚かない者はいないだろうが。

本日三回目の溜め息を吐きながら、一方通行は重い腰を上げた。

「……オイ、とつとと行くぞクソガキ」

「えっ？ どこに行くの？ って、ミサカはミサカは尋ねてみたり」

「……買い物に決まってるんだろオ。さっきはオマエらが何言ってるか分からなかったけどよオ、どうせ黄泉川のヤロオが買い物押し付けてきたんだろ。直接頼まれたオマエが疑問符浮かべてどうすんだよ」

「そ、そうだけど、素直に従うなんて珍しいなって、ミサカはミサカは珍しいものを見る目であなただを見上げてみたり」

「……勘違いすんじゃないぞ、俺は元々コンビニにコーヒー買いに行くつもりだったんだ。そのついでに行ってやるってだけだ」

「さっきは『めんどくせエからオレはパスなア』とか言ってたのにな？って、ミサカはミサカはあなたの証言の矛盾を指摘してみたり」

「……気が変わったんだ」

痺れを切らした一方通行は、「ゴチャゴチャ言うなら置いてくぞクソガキ」と苛立たしげに言い放ち、打ち止めを待たずにスタスタとエントランスを出ようとしてしまう。

「まっ待ってー！って、ミサカはミサカは慌ててあなたを追いかけてみたり！」

すかさずその後を打ち止めが追う。エントランスを出て、マンション入口手前の所でようやく彼に追いついた。彼女は隣の白髪の少年に向けて恨みったらしく呟く。

「あいたたた……それにしてもさっきのがまだ痛むよって、ミサカはミサカはおでこをさすりながら、あなたを般若のごとく睨み付け

てみたり」

「……うるせエぞクソガキ。自業自得だろオが」

「むっ……」

拗ねたような表情になる打ち止めを見た一方通行は、今度こそ本日最後だと思いたい四回目の溜め息を吐く。

「……たまには菓子も買っていくかア」

「いいの！？ やったー！って、ミサカはミサカはやる気満々になっ
てみたり！」

「へっ、さすが一晩で全部平らげただけあるじゃねエか。急に元気
になりやがった」

「だから私は犯人じゃないってばー！」

春はすぐそこまで来ているが、2月の風はまだまだ冷たかった。
彼らのおつかいはまだ、始まったばかりだ。

第3話 とある菓子の紛失事件3（後書き）

文中に2月とありますが、時間軸は無視の方向で。

第4話 とある菓子の紛失事件 4

「……さアてそんじゃ、さっさと買い物終わらせて帰ろつぜエ」

一方通行と打ち止めの2人は、黄泉川に押し付けられた買い物をするべく、駅前にある大型スーパーへとやってきた。

「えー？ せっかく珍しくこんなところに来たのに、すぐに帰っちゃうの？」って、ミサカはミサカは残念がってみたり……」

打ち止めは心底残念そうな顔をして彼に訴えかける。

「あア？ 何か他にすることでもあンのかよ」

「ミサカはね……」ゲーせん”なるものに興味があるのだー！って、ミサカはミサカはよくぞ訊いてくれましたとばかりに」

「却下」

「即答!？」

まさかここまで早く断られるとは思ってなかったのだろつ。打ち止めは今にも絶望の擬音が流れてきそつな表情だ。

「ケツ、ゲーセンだア？ あんなモンは金の浪費にしかなんねエって相場が決まってるだよ」

「そついうあなたは”ゲーせん”に行ったことあるの？」

「あるわけねエだろ」

「じゃあじゃあー!」

「行かなくても分かるんだよ、ああいうのはな」

「そ、そんなあ……………今日のあなたはちょっとケチかもって、ミサカはミサカはぶーたれてみたり」

「……………なーんか急に菓子買う気無くなつてきちまったなあ」

「うそうそ! ” げーせん ” は放つといて早く買い物しよう! ってミサカはミサカはあなたを買い物売り場の方へ促してみたり! 」

「……………オマエのその切り替わりの早さは、もはや才能の一種かもしんねエなあ」

大好きなお菓子を買ってもらえなくなる危機を脱し、ほっと胸を撫で下ろした彼女を見て、一方通行は心底呆れた様子で呟く。端から見るとその様子は兄弟喧嘩をしているようでとても微笑ましいのだが、勿論当の本人らは全く気付いていないのであった。

2人が食品売り場に着くと、一方通行は隣の少女に今更すぎる疑問をぶつけた。

「ところで、今更訊くのもなんだが、黄泉川は何を買ってこいつて

言ってたんだ？」

食品売り場の入り口でカゴを取りながら訊く。

「お菓子を3000円分買ってこいって」

「嘘つけクソガキ」

「バレたかゝって、ミサカはミサカは詐欺師よろしく爽やかスマイルを浮かべてみたり」

あっけらかんと笑う打ち止め。ムカついた一方通行は深く考えず、隣の小動物にとりあえずげんこつを喰らわせることにした。

「いたあい……」

「……黄泉川は何を買ってこいって言ってたんだ？」

「えつとね……特に指定はしてなかったよ。このお金で適当に食材とお菓子を買って来いって。あ、そうそう、たしか”ネギ”は絶対に買ってこることって言ってた！」

「ンじゃ、ネギとあとは適当に買うことにするかア」

とりあえず、一番近い野菜売り場の方へ向かうことにした。打ち止めがネギを素早く見つけてカゴの中へ。

その後も打ち止めはちょこまかと動き回り、一方通行の言う食材を素早く見つけて持ってきた。それはまるで、ペットが飼い主の指示に従っているようにも見える。

そんな感じで飼い主・一方通行は、はしゃぎまくる打ち止めをたび

たび制止しながらも、なんとか買い物を終えたのだった。めでたしめでたし……

「……って、ちょっと！ 肝心のお菓子は！？」

「オイオイなんだよ、これで話は終わりじゃねエのか？」

「終わりなわけないでしょ！って、ミサカはミサカは必死に抗議してみたり！」

「せっかくキレイに話が終わろうとしたのによオ」

「お菓子を買うまで話は終わらないよ！ ……あ、いいところに駄菓子屋が！ あそこに寄って行こう！って、ミサカはミサカは無理矢理あなたを引っ張ってみたり！」

「チツ、面倒くせエな……」

一方通行は打ち止めに促されるがままに、駄菓子屋へ。遠くから見るときは小規模なものに見えたが、近づいていくにつれそれなりに大きい店舗だということが分かった。ぱっと見たところ品揃えも豊富で、駄菓子のバリエーションも様々。そのような店なのにも関わらず、客がまばらで数えられる程度なのは、立地条件の悪さが原因だろう。メインストリートからも離れた隅っことあれば、客は気付

かないだろうし、実際彼も打ち止めに言われるまでその存在にさえ気付かなかった。

しかし見通しの良い店なので、すぐ隣にある休憩所にいけば、このやんちゃな少女を見失うことはないだろう。

促されるままだった彼は疲れた体を休めるべく、休憩所へと向かう。今度は打ち止めが引きづられる形になった。

休憩所に着くと、見通しの良さを再度確認し、ソファに腰を下ろす。

「ここで待ってるからさっさと買ってこい。金はさっきの買い物之余りがあるだろ」

「あなたは一緒に来てくれないの？」

「ちつとばかり疲れたからなァ、ここで待ってる」

「……分かった！ ちゃんと待っていてくれなきゃだよ？ って、ミサカはミサカはあなたに念押ししてみたり」

「……分かってる。いいからさっさと行って来いクソガキ」

「うんっ！」

一方通行に満面の笑みを見せ、彼女は店へ走っていく。彼はそれを見送ったあと、ソファへ深く腰を沈めた。疲れた体が心地良い感触に包まれるのが分かる。悪くない気分だ。

一息ついたところで彼はようやく気付いた。休憩所に設置されている、一定のリズムを刻むその機械の存在に。

第5話 とある菓子屋の紛失事件5

「……あア？ なんだこりゃ」

少女が駄菓子屋へ行った後の休憩所では、学園都市の第一位が一人、少し離れたところにある”それ”に視線を向けていた。

彼の見る”それ”はかなり大型のものだった。大型のスクリーンの下にはタッチパネルらしきものがあり、こちらも相当な大きさだ。左上と右上の出っ張りにはこれまた大型のスピーカーがあり、先ほどから休憩所にリズムミカルな音を奏でている。しかもかなりの大音量だ。

平たく言えば、巷で”音ゲー”と呼ばれる代物だった。

当然ながら、学園都市最強の超能力者である一方通行は、そんなゲームなどやったことはなかった。

「……あんなの何が楽しいんだかなア」

一方通行は興味を無くし、駄菓子屋の方へ身体を向け、ソファへ改めて深く座り込む。しかしそれから暫くすると、

「楽勝だ、超能力者！」

ピクッ。

第一位の肩が僅かに反応を見せる。

「……聞き間違いだ、聞き間違い」

一瞬とんでもない言葉が飛んできた気がするが、それが学園都市最強の彼に向けて向けられた言葉だとはとても思えない。彼は改めてソファに沈み込むが

「楽勝だ、超能力者！」

また聴こえた。はつきりと。

今度こそ、一方通行は振り返った。そこには。

彼が「クソガキ」と呼ぶあの子と同じくらいの背丈の、小さな少女がいた。

「……」

あの少女が自分に向けて言ったのかと一瞬彼は思ったが、そんなこととはありえないとすぐ結論を出した。あんな年端もいかない少女が学園都市の第一位の顔を知っているとは思えない。第一、さっきの声はどちらもある大人の男のものだったからだ。

見ると少女は先程の辺りに爆音を撒き散らす大型の筐体の前で、ガッツポーズを決めている。

「……おい、そのオマエ」

「じゃあ？」

一方通行が話しかけると、少女は変な声を発しながらこちらへ振り

返った。服はひらひらしたスカートと一体になったもので、整った顔立ちをしており、それは美少女と呼ぶに相応しかった。やけに肌が白く、目は青い。モンゴロイドのそれとは違う、外国人かハーフかと思われた。一見すると、かなり目立つ。さつき筐体を見たときは居なかつたようだが、座りなおした後にここにやってきたのだろうか。

「さつきから『楽勝だ、超能力者』とかいうアホみてエなセリフが聴こえるんだがよオ」

「ああ、それなら大体これよ」

と、少女は目の前の筐体を指差した。一方通行が目を細めて画面を見る。スクリーンには、高校生ぐらいの見た目の茶髪の少年が映っていた。そこらへんにいくらでもいそうなチンピラに見える。彼の体から伸びる吹き出しの中には、「コングラッチュレーション！」と、カタカナで表示されていた。そして次の瞬間、それはまた聞こえた。

「楽勝だ、超能力者！」

「……………」

一方通行は少しばかり腹が立った。こんなことで怒るのは彼にしては凄く珍しいことなのだが、買い物で疲れた身体を休ませようとしていたところだ。いつもより沸点も低い。

「……………その機械は何でさつきからそんなセリフ吐いてやがんだア？」

「んつとね、大体これはこのゲームでは「大成功！」って意味なんだよ」

「大成功だア？」

「そう！ 大体私が今、最難関のレベル5……いわゆる「エクトリムモード」をクリアした証でもあるわけよ！」

「……そオいうわけか」

どうやらさつきから筐体が発する不愉快な台詞『楽勝だ、超能力者！』は、ゲームをクリアしたときに流れるものらしい。延々と流れているので喧しいことこの上ない。

「イライラするからやめてくれ」

「やだ」

即答だった。

「大体、この『jubeat』ってゲーム、面白いんだもん！ 今日初めてやったのにエクストリームモードをクリアしまくっちゃう私は大体、天才の素質があるってことかしら？」

「そんなことは誰も訊いてねエよ。その不快な音を出すんじゃないエつつつてんだ」

首チョーカーのスイッチをONに切り換えれば、今すぐこの不快な台詞を音量に関係無くシャットアウトすることもできる。しかしそ

んなことにバッテリーを浪費したくはなかった。

「ええーそれってつまり、『良い結果を出すな』ってこと？ それ
はちよつと……そうだ、じゃああなたがやってみてよ！」

「はア？　なんでそオなるンだよ」

「大体、私じゃ簡単すぎるしね。それに、その様子じゃあなたもこ
れ、やったことないんでしょ？」

「……まアな」

少女は彼の答えを聞くと、

「じゃあやってみてよ！」

と、にこやかに微笑んで言った。ふいにその顔が、駄菓子屋にいる
少女の顔と重なる。

「……」

一方通行は駄菓子屋へ視線を向け、打ち止めがまだ店内を歩き回っ
ているのを確認する。このままこの金髪の少女がゲームをクリアし、
あの台詞を何回も聞くのは益々腹が立ちそうだし、アイツが帰って
くるまで暇だ。付き合ってやってもいいだろう。

「言つとくが、金はねエぞ」

「大丈夫よ、大体お小遣い貰ったしね」

「……そオカ。それなら、」

学園都市の第一位は、重たい腰を上げる。

「……上等じゃねエか。そのチンピラ茶髪野郎の顔にもムカついてたところだ」

第5話 とある菓子の紛失事件5（後書き）

新約一巻読んだ後なので彼女が登場。

第6話 とある菓子子の紛失事件6

「ちつくしよオオオオオオオオオオオオおおお!!」

「わあっ!? ちょっと、あなたいきなり奇声張り上げてどうしたの?」

「なんだこりゃア!? 舐めてんのかア!? なんだこの難しさはアアア!!」

一方通行はとどのつまり、舐めていた。この筐体は全国的にも有名な音楽系ゲームメーカーが開発した、学園都市製の最新機種のものであったが、「これはあまりにも難しすぎる」とファンが激怒し、そのあまりの難しさに誰もプレイしなくなったため、メーカーが難易度調整の対応に追われているという、いわくつきの代物だったのだ。

「ハア……ハア……」

「だっ大体あなた、だいじょうぶ?」

「……全然平気だぜエ」

「いやいやいやいや、大体とてもそんな風には見えないんだけど……」

完全に舐めていた。隣の小さな少女を見ながら思う。こんな年端もいかないガキが、最高レベルでクリアできたのだから、どれだけ簡単なのかと高をくくっていたのが間違いだった。

「もうやめとく?」

「ここまできて止められるかよ」

「いやまだ2プレイしかしてないけどね。大体、あなたは見る限りもうへとへとみたいだけど」

金髪少女は呆れ顔で言う。

「うるせエな、まだまだ余裕だつツウの。……本当にオマエ、これやるの今日が初めてだったンだろオな?」

「当たり前よ。大体、今日だって久しぶりに外出できて、ここに来たのも初めてなんだからね。しかも迷子になっちゃうし。やんなっちゃうにゃあ」

「そオなのか……って、はア?」

彼女は自分が迷子だと、なんでもなさそうな調子で言った。
彼女はきよとんとした顔で、

「? どうしたの? やっぱゲームやめる?」

「違エよ。……オマエ、迷子なのか」

「えっ? あ、うん。大体そうだよー。でも心配しなくても大丈夫よ!」

金髪少女は胸を張り、高らかに宣言した。

「お姉ちゃんが絶対探し出してくれるからね」

「……そオカよ」

その”お姉ちゃん”に相当な信頼を寄せているのだろう。彼女の顔には全く不安の色が見えない。

「……つつか、そこまで言っつてことはオマエ、今まで何回も迷子になってやがるな？」

「にやはは、ばれた？」

彼女は照れくさそうに笑う。子供特有のまぶしい笑顔だ。

「ってそんなことより、あなたはゲームに集中した方がいいんじゃない？ 大体、そんなんじゃないつまで経ってもクリアできないよ」

「……そオだな」

一方通行は逡巡した後、再び筐体に体を向ける。その”お姉ちゃん”とやらが「必ず見つけてくれる」というのなら、ここで待っていた方が相手も見つけやすいだろうと判断した為だ。

「さアて仕方ねエな……」

彼は目の前の標的である 筐体のスクリーンを睨みつけ、

「ここからはスクラップの時間だぜエ」

能力を開放すべく、首子ヨーカーへと手を伸ばした。

「ヒヤッハア！！ 愉快に素敵に決まっちゃまったぞこんちくしょオ
！！」

結果的に、このまま通常モードでゲームを続けても体力の浪費だと考えた一方通行の判断は正解だった。筐体のスクリーンは、例の「コングラッチュレーション！」の文字を浮かべ、スピーカーからは例の「楽勝だ、超能力者！」の台詞が流れている。勝者の余韻に浸っている一方通行には、それさえも祝福のファンファーレに聞こえた。

「嘘でしょ……！？ このゲーム王の私はともかく、一般人がこんな記録を叩きだせるなんて……！！ だっ大体、さっきまであなたE判定だったじゃない！ どんな裏技を使ったわけ？」

「ケツ、やっぱこんなのは、話にならねエな。簡単すぎてヘドが出る」

「ちよっとー！ 話を聞きなさいよー！」

その後も一方通行は、どっちのお菓子にしようか決め兼ねている打ち止めを遠目に見ながら、3プレイほどそのゲームをやった。本人は「簡単すぎるぜ。全くもって話にならねエ」とか言っているが、このゲームに彼が短時間ですっかりハマったのは言うまでもないだろう。

一方通行がバッテリーの温存の為に金髪少女と交代した後。このゲームの熱烈なファンが来て、少女のプレイを見て驚愕を露にしたり。そのファンが2人に「この鬼畜なほどの難しさが寧ろいいんだよ。今までのが簡単すぎただけでうんぬんかんぬん……」と誰が頼んだわけでもないのに勝手に眠くなるような熱弁を始めたり。試しに2人協力プレイを試してみたら全国順位に載ってしまったりと。

「……………あつ……………、フレメア！」

そのようなことをしているうちに、彼女の”お姉ちゃん”が来た。

「あつ……………！ フレメンダお姉ちゃん！」

ゲームのプレイ中だったことも構わず、フレメアと呼ばれた金髪少女は、フレメンダというらしい姉の胸に飛び込む。おそらく妹を必死に探し回っていたのであろう彼女は髪を振り乱しながら怖い表情だったが、妹を抱きしめてようやく安堵の表情を浮かべる。

「はあ……………よかったあ。いつもはすぐ見つかるけど、今回は場所が場所だからねえ。見つからないかと思っただわよ！ 結局今回も見つ

かったからよかったけど」

「ごめんね……」

フレミアが悲しそうな表情を浮かべたのを見てフレンドはニカッと笑い、

「もう迷子になるんじゃないよー？ ……早く帰ってご飯にしよう
！」

妹の頭を撫でながらそう言った。

「……うんっ！ あ、お姉ちゃん、あの人が一緒に遊んでくれたんだよ！」

「ん？」

その時フレンドはようやく、筐体の前に鎮座している学園都市最強の超能力者の存在に気付いた。しかし彼女は運が良かった。過去に彼の資料にも目を通したことがある彼女だが、「彼が誰なのか」思いつくことはなかったからだ。

「いや、妹がお世話になったわね。感謝するわ。ありがとう！」

「……ケツ、大したことはしてねえよ」

第一位は吐き捨てるように言う。

「ありがとね、お兄ちゃん！ また遊ぼうねー！」

金髪少女は一方通行に手を振りながら、休憩所から去っていった。もう片方の手は、しっかりと姉の手を掴んでいる。

今日の晩御飯は結局、サバの味噌煮にしようと思ってるわけよ。お姉ちゃんもそれ好きだよねー。姉妹の会話が聞こえてくる。もう二度と聞くことはないであろうその声が遠ざかるのを感じながら、一方通行は深く深くソファへ身体を沈める。打ち止めのいる駄菓子屋の方を向くと、彼女はようやく買う物を決めたようで、レジに並んでいるところだった。

もう少ししたら満面の笑みで駆け寄ってくるであろう打ち止めを頭の中で想像しながら、一方通行は目を瞑る。休憩所は金髪少女が居なくなり、随分と静かになった。筐体が未だに不愉快な台詞を吐き続けているのに変わりはない。……だが、

悪くない、気分だった。

最終話 とある菓子紛失事件7

「こっちはやっぱり人が多いねーって、ミサカはミサカはあまりの人口密度に感嘆してみたり！ もぐもぐ」

「オイ、菓子食ベんのは家帰るまでお預けだ」

打ち止めは早くもお菓子のつまみ食いを始めていた。駄菓子が沢山入った紙袋を持ち、機嫌良さそうにニコニコしている。

「ヨミカワとヨシカワが見てないから大丈夫だよって、ミサカはミサカはバレなきゃ平気と自分を正当化してみたり！」

「俺の存在を忘れてンじゃねェよ」

と言いながら、一方通行は打ち止めの持っている紙袋を素早くひったくる。

「あつ、ちよつと！」

「晩飯食えなくなるだろオが」

「うつうつ……たしかに。それだと、ヨミカワにもバレちゃうかも」

「家に帰るまでぐらい我慢しやがれクソガキ」

一方通行と打ち止めは現在、駄菓子屋を離れ黄泉川のマンションへ戻ろうとしているところだった。出発したのは3時すぎだったので、5時には帰れるだろうと一方通行は踏んでいたが、駄菓子屋に寄っ

たことで当初の計画はあっさり破綻した。彼らが駅前のメインストリートまで来た時には、既に陽が傾いていた。この時間帯は学校帰りの生徒も多く、メインストリートは多くの学生で賑わっている。そんな中、

「……ちょっと待ちないよアンタっ！ ……黙って”これ”受け取れこの野郎オオオオオ！！」

「ん？ ……！？ ビリビリお前、まさか”これ”……」

「（……よっしゃ！ ちゃんと言えた！ ゲツジヨブ今日の私！ 昨日黒子の目を盗んで練習しまくった甲斐があったわ！）」

「（……いやいやここは冷静に、落ち着こう。いつも襲ってくるビリビリが俺なんかに”これ”をくれるはずないし……そもそも不幸の日本代表である上条さんが今までこんなのを貰ったことなんて皆無なわけで……うう、自分で言ってる嫌になってくるぜ）」

「（……あれ、アイツいつまで経っても受け取らないわね……はっ、まさか！？ やっぱりいつも電撃食らわせてるから……私そんなに嫌われてたの！？）」

「（落ち着け、他にビリビリが”これ”を俺に渡してくる理由を考

えるんだ……………はっ、よし分かったぞ！　そうだよこれしかねえよ絶対！」

「（うう……………もうお終いよ……………やっぱり普段からもっと大人しくしとくべきだったわ……………でも、コイツが他の女の子と一緒に居るのを見ると、いつも気が付いたら手が出ちゃって……………）」

「……………おい、ビリビリ（これだ、これしかない）」

「ふえっ！？（は、話しかけてきたっ！）」

「……………ダメだ」

「……………え！？（やっぱり受け取って貰えないの！？）」

「……………俺に毒味はできない」

「……………へ？」

「これってつまりあれなんだろ……………。お前は『好きな人のために作った』これ”が上手くできたかどうか分からなくて、自分が毒味しようとも思ったけど、不味かったらアレだからとりあえずコイツに食べさせてみよう』って事なんだよな……………分かる、俺には分かるぜ……………我ながら完璧な推理だ」

「はい？」

「でもそれはダメだ御坂！　お前が好きなヤツのために必死こいて作ったんだろ！？　途中で挫折そうになっても、泣きそうになっても、挫折せずにここまで必死に作ってきたんだろ！？　お前は、慣

れない料理をしたからどうせこんなの不味いに決まってる、そう思
ってるのかもしれない……だけどそれは違うんだ！ 味なんか関係
ねえ！ 『好きな人の為に一生懸命作った』って事実だけで充分な
んだよ！ どんなに味が不味かろうが、それさえあれば受け取った
相手は絶対笑ってくれる！ そして感謝してくれる！ お前が渡し
た相手がもし、こんなに頑張ったお前を嘲ることがあったとしたら、
そいつの幻想は俺が跡形も無くぶち殺してやる！ さあ、そいつの
所へ行こうぜ御坂！」

「ちょっとアンタまた何か盛大に勘違いしてるでしょ！ いや、ま
あ一部間違ってるけど……って、ちょっと離さないよお
おおおおー！」

「なんだかあつちの方が騒がしいねって、ミサカはミサカは興味津
々になってみたり」

「何処のバカが騒いでんだかなア」

駅前がやけに騒がしいが、人の壁で向こうの様子が全く見えない。

「ああいう面倒臭エのには関わらないに限る」

2人は再び家路へ進む。来た時よりも影が長いな、なんてことを一
方通行は思い、そんな平和ボケした思考をする自分に驚く。学園都

市最強の超能力者でもそんな事を思うと知ったら、黄泉川たちは爆笑するに違いない。

一方その頃、隣のアホ毛少女は、駅前の大型ビルのテレビ広告を眺めて驚愕していた。超大型のスクリーンではアナウンサーが、今日がバレンタインデーであり、街がカップルで溢れていることなどを報道している。

「(えっ、バレンタインって今日だったの!? どうりでさっきから街がピンク色の雰囲気になってるわけだね……。ミサカとしたことが、すっかり忘れてたよ……)」

バレンタインの事は、以前テレビの特集で見たので知っているが、いつがその日なのかは覚えていなかった。

「(あつでもたしかチョコなら、さっき駄菓子屋で……)」

「……ねえねえ一方通行」

「あん?」

「その紙袋、一旦私に返して! お菓子一個取るだけだから!」

「家に帰るまで我慢しろっつたろ」

「今じゃないとダメなの! ……黄泉川たちに見られたらちよっと恥ずかしいし……」

「ああ? 何か言ったか? つうか、何で今じゃないと駄目なんだ

よ……」

学園都市第一位はバレンタインなどに興味は無く、またその知識についても致命的に乏しかった。バレンタインなど、製菓企業が金儲けのために決めたもので、そんなものに踊らされる世間がバカにしか見えないと思っっているくらいだ。

「どうしても今じゃないとダメなの！って、ミサカはミサカはあなたに必死に懇願してみろ！」

上目遣いに見つめてくる彼女に彼は、もう数えるのも忘れた溜め息を吐き……折れた。

「……一個だぞ」

「うんっ！」

一方通行は紙袋を持ち主に返し、彼女が中から一個取り出したのを確認すると、また紙袋を受け取る。

「で、オマエはそこまでして何が欲しかったんだ？」

「気になるー？」

「……まアな」

「それはね……」

そう言っただけで彼女はお菓子を取り出しながら、

「これだよ！　そしてこれは……あなたへのバレンタインプレゼントー！」

打ち止めはそのお菓子を彼に見せ付けてから、彼の手にそれを捻じ込んだ。

「あん？　……なんだよコレ。ていうかコレ、オマエが欲しかったモンじゃねエのか？」

「私はこれをあなたに渡したかったの！　って、ミサカはミサカは頬を赤らめて照れながら心中を吐露してみたり！」

第一位の手には、駄菓子屋でよく売ってるような、中央に穴がある丸型のお菓子が握られていた。

「……って、5円チョコじゃねエか」

「知ってるんだ？　って、ミサカはミサカはあなたの意外な一面を垣間見してみたり」

「さすがにコレは俺でも知ってるっつの……」

いくら興味の無い彼でも、今日がバレンタインだということに気付いていないわけではない。テレビやスーパーで大々的に宣伝していれば、嫌でも気付くというものだ。逆にそれに気付かなかった打ち止めは能天気のな意味で只者ではないのかもしれない。

「……そオカ、バレンタイン、か」

「ごめんね、今日がバレンタインだって知ってたら……、それこそ手作りでもなんでも作ったんだけどって、ミサカはミサカは表情を曇らせてみたり……」

「……」

一方通行は5円チョコを凝視した後、適当に中身を取り出し、パクツと口の中へ放り投げた。

暫しその丸型の食べ物をお口の中で転がす。

「ど、どう？って、ミサカはミサカは手作りでもないのに感想を求めてみたり……」

「やっぱり甘エな」

彼は吐き捨てるように言い、

「……次は苦くしろ」

と、なんでもなさそうに言った。

「次」がある。暫く彼の台詞を頭の中で反芻し、彼にそう言ってもらえた事がたまらなく嬉しくなった打ち止めは、顔を真っ赤にしてよく分からない声を上げながら、彼の周りをぐるぐるぐるぐる走る

り始めた。

「この上なく鬱陶しいぞクソガキ……」

そう言われても尚、打ち止めは駆け回っている。

「はア……ほら、こうすりゃ逃げねえだろ」

「へっ!？」

「まったく、大人しくしやがれ」

第一位は自分の周りをぐるぐる駆け回る打ち止めの手を掴む。その手を二度と離さないために。

「とつとと帰るぞクソガキ。腹ア減ってどオにかなっちまいそうだ」

「（ぜ、絶対無自覚だこの人!つて、ミサカはミサカはあなたのためさかの大胆行動に、心の中で非難の声を浴びせてみる!）」

「オイ、分かったのか」

「う……うん!つて、ミサカはミサカは照れながらあなたの後ろをついていってみたい……」

こうして彼らの、「はじめてのおつかい」は終わりを告げた。……今回の事の発端が、黄泉川たちの作戦によるものだとは知らずに。

しかし黄泉川の目論見は達成されたのかもしれない。なぜなら彼は

彼女の顔を見て、内心確かに笑っていたからだ。

「……………一方通行！」

「あん？」

呼ばれて打ち止めの方を向く。彼女は一方通行を見上げて何か言おうとしているようだが、口をぎこちなく動かすばかりで何も聞こえない。

「なんだよ、はっきりしやがれ。オマエらしくもねエ」

「えつとね……………えへ、なんでだろ。いつも普通に言ってることだけど、今日はなんだか照れくさいな」

彼女は暫く言い淀んでいたが、やがて決心したのか彼を見上げ、夕陽に照らされた眩しい顔で言った。

「……………いつもありがとね、アクセラレータ一方通行！」

最終話 とある菓子の紛失事件7（後書き）

なんとか書ききることができました。一方通行の口調がよく分からなくなったり、ダレた部分もあったと思いますが、書き手としては満足です。こいつら手繋がせてみたかったんだもん。

上条さんの説教部分は書いてて楽しかったなあ。また書きたい。

手を繋ぎながら家に帰った彼らが、黄泉川たちにニヤついた笑みを浮かべられたの言うまでもありません（笑）

追記：よければ感想やアドバイスをお願いしますm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1441r/>

とある日常の最後欠片<ラストピース>

2011年5月22日13時03分発行